

平成 29 年度第 6 回市原市市民活動・協働推進委員会議事録

1 日時 平成 30 年 3 月 18 日（日）午前 9 時 00 分から午前 11 時 50 分まで

2 場所 市原市役所 議会棟第 4 委員会室

3 出席者

(1) 委員

関谷委員長、鈴木副委員長、赤松委員、栗原委員、千葉委員

(2) 事務局

ア 市民活動支援課

藤井課長、高橋主幹

イ NPO・ボランティア支援室

中原室長、谷川副主査、朝枝主任

4 議事

(1) 平成 29 年度市原市市民公益活動支援補助事業に係る成果報告

ア 鶴舞踊りの会

イ 傾聴の友「やすらぎ」

ウ 健幸寿命のばす会

エ 親子サポート Cocorosalon Aun

オ もぐらの冒険

カ オリーブコミュニケーション

(2) 委員長全体講評

5 議事の概要

(1) 平成 29 年度市原市市民公益活動支援補助事業の補助団体 6 団体からの成果報告を受け、各団体に対し、委員による質疑応答及び講評を行った。

(2) 平成 29 年度市原市市民公益活動支援補助事業について、委員長による全体講評を行った。

6 会議経過

以下のとおり

(司会)

定刻となりましたので、ただいまより、平成 29 年度第 6 回市原市市民活動・協働推進委員会を開催いたします。

本委員会は、市原市情報公開条例第 33 条の規定により、会議を公開するよう努めなけれ

ばならないと定められておりますので、本日の会議を公開とし、開催することといたします。また、内部資料としまして、会議の録音並びに会議中の写真を何枚か撮影したいと存じます。予め御了承をお願いいたします。

それでは、はじめに、関谷委員長より御挨拶をお願いいたします。

(委員長)

本日の第 6 回市原市市民活動・協働推進委員会は、みなさんがこれまで活動されてきたことの報告と、活動の意義や問題、課題などがあればそれも率直に話していただいて、共有した中で今後につなげ、有意義な時間にできればと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

(司会)

これより議事をお願いしたいと思います。

市原市附属機関設置条例第 5 条第 1 項の規定により、委員長が会議の議長となることとされておりますので、以降の進行を委員長をお願いいたします。

(委員長)

議事の進行に先立ちまして、会議の成立要件について確認を行いたいと思っておりますので、事務局から報告をお願いいたします。

(事務局)

本会議の成立要件につきましては、市原市附属機関設置条例第 5 条第 2 項の規定により、委員の皆様の過半数の御出席が必要となります。

本日は、総委員数 6 名のうち、5 名の出席をいただいておりますので、過半数を超えておりますので、本会議が成立していることを御報告いたします。

(委員長)

ただいま、事務局から出席委員数の報告がございました。その結果、市原市附属機関設置条例第 5 条第 2 項の規定により、本委員会は成立しております。

なお、議事録につきましては、委員長と副委員長が議事録署名人を務めたいと思いますが、いかがでございますか。

－異議なし－

それでは、議事録署名人には、委員長と副委員長があたることといたします。

また、平成 29 年度市原市市民公益活動支援補助事業ステップアップ事業に係る評価の答申については、本日の各委員の講評をもとに、私と事務局にて作成し、市に提出したいと思いますが、よろしいでしょうか。

－異議なし－

それでは、そのような形で進めさせていただきます。

議事に入る前に、傍聴人をお願いします。お手元の「傍聴要領」を守り、係員の指示に従ってください。これに違反した場合は、退席いただくことがありますので、御承知をお願いします。

それでは、本日の議事に入ります。まず、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

議事の説明に先立ちまして、「市原市市民活動・協働推進委員会」の委員を御紹介させていただきます。

－委員紹介－

それでは、本日の議事でありまして、「平成 29 年度市原市市民公益活動支援補助事業ステップアップ事業に係る評価について」ということで、(1)成果報告及び各委員講評、(2)委員長全体講評につきまして、御説明いたします。

－説明－

(委員長)

それでは、議事に入ります。

「鶴舞踊りの会」様、成果報告をお願いいたします。

－「鶴舞踊りの会」成果報告－

(委員長)

それでは、委員より講評をお願いいたします。

(委員)

とてもいい活動を継続して行っていると思います。地域のために何かをしたいという方は、かなり増えているとは思いますが、なかなかきっかけがつかめない。核家族化して横の

つながりが薄くなっている中、今回は若い人たちの参加があったとのことで、これをどんどん進めていってほしい。次の展開として、ブラスバンドや振り付けを若い人たちと一緒に取り組もうとしており、このような輪が地域の中に広がると、ますます皆さんが楽しめる会になるのではないかと思います。

(委員)

大変すばらしい活動を聞かせていただきました。町会、小中学校、大学、地域などの連携の中心になっている姿が見えたのが印象的でした。こういった地域の活動は、誰かが中心になって取り組まないと進んでいかないところがあります。自ら進んで先頭に立っている点が良かったです。今後ともこれをさらに伸ばしていただいて、特に、小中学校に対するアプローチが進んでいけば、もっと活動が進んでいくのではないかと思います。

(委員長)

今日は生演奏も拝見し、実際、見てみないとわからないところもありますし、実際見る場面、参加できる場面が増えていくことは大事なことだと思います。

ポイントは活動の持続性だと思います。報告を伺うと少しずつであれ、様々な方々や各方面を巻き込み、一緒に取り組もうという裾野が広がっている点は非常にいい流れになっていると思います。

コミュニティの力はいろんな世代が交わることが大事です。そういう意味では、大学生との交流、小中学生との交流、PTAの反応、異世代が交わるところを広げていくことが、コミュニティ力を作っていくことになりますので、その一つのきっかけとして、鶴舞踊りが共有されていくことに期待したいところです。

ただちに連携ができるわけではないにしても、いろいろな世代、分野、領域の活動団体と開かれていくこと、自分たちを開いて仲間を作っていくということが大事になってきます。今取り組まれている活動を積極的に展開され、これまで以上に地域のつながりが出てくることを期待したいと思います。

以上で、「鶴舞踊りの会」様の報告を終わりにしたいと思います。

(委員長)

続きまして、「傾聴の友『やすらぎ』」様、成果報告をお願いいたします。

— 「傾聴の友『やすらぎ』」 成果報告 —

(委員長)

それでは、委員の講評をお願いします。

(委員)

大変素晴らしい活動を聞かせていただいてありがとうございました。話すのが得意だという人は多いですが、他人の話を聞くことは難しい。それを実践されていて非常に素晴らしく頭が下がります。

一点確認したいことは、昨年採択の際のコメントの中に施設からの寄付金を増加したらどうかと書いてありましたが、その点はどうされたのでしょうか。

(傾聴の友「やすらぎ」)

私どもの活動の基本的な進め方は会を4つのグループに分けて、その中で各リーダーとサブリーダーを1名ずつおいて幹事会を作り、活動方針を決めていきます。その中で、施設から寄付をいただくと、施設の要望を聞かなくてはいけなくなり、ボランティア活動ではなくなってしまうのではないかと懸念があるため、やめようということになり、臨海部の企業を回ってお願いに行ったところです。

(委員)

承知しました。資金集めは大変ですが頑張ってください。

(委員)

市原市の中で、傾聴を必要としている人はたくさんいると思います。市内にある傾聴3団体が連携して、行政や社会福祉協議会と連携しながら、目標を作ったらどうでしょうか。

例えば、今年はどれくらいの人に対して傾聴するので、資金はこれくらい必要ですといった具体的な計画を立てて、企業を回られると、説得力が出てくると思います。漠然とした目標だと企業もどう対処したらいいかわからなくなりますが、具体的な目標があると、企業もここまでなら協力できるなど、答えやすくなるのではないかと思います。

(委員)

一点お聞きしますが、市原市社会福祉協議会に傾聴の要望があるとのことでしたが、どのくらいの頻度で要望があるのでしょうか。

(傾聴の友「やすらぎ」)

私たちは、施設から直接依頼されることもあります。必ず市社協を経由して要望にお応えするようにしています。施設訪問の前には、市社協と当団体と一緒に施設へ下見に行き、市社協で判断していただいてから、訪問します。

市内の傾聴ボランティア団体3団体のうち、1団体は個人宅を訪問していますが、当団体は施設を4~5人で訪問します。施設訪問の信用性は市社協に委ねている実態にあります。

また、資金集めの質問がありましたが、企業に回った際に、団体の名前を出しても信用さ

れない。この補助金の実績報告を持参し、市原市から補助金を受けている団体であるということが一番の信用になっています。

(委員長)

資金面での持続性を考えたときに、確かに団体活動としてどう信頼を得るかということも大事ですが、もう一つ大事なことは傾聴活動の「必要性」です。

施設単位でも個人単位でも、傾聴の場を必要としていることをどのように伝えていくか。問題が共有されないと人は動きません。他の団体を含め、傾聴活動の「必要性」が地域の現場でどの程度あるのかという情報を可視化していくことが今後問われてくるところです。

その問題の理解や共有があることで、私には何ができるのかという参加への誘いや資金面での支援というところにもつながっていくことになります。

ぜひ、傾聴活動が現場にとって必要とされているということがわかるような情報発信を併せてしていただき、これからも裾野を広げながら活動していただきたいと思います。

以上で、「傾聴の友『やすらぎ』」様の報告を終わりにしたいと思います。

(委員長)

続きまして、「健幸寿命のばす会」様、成果報告をお願いいたします。

－「健幸寿命のばす会」成果報告－

(委員長)

それでは、委員の講評をお願いします。

(委員)

これからは高齢化社会ですので、とても良い活動だと思います。各方面から体力測定の講師と呼ばれていますし、駅と駅の間を歩いてこんな花が咲いていたとか小さな楽しみを見つけるのも、良い活動になると思いますので、これからも頑張っていってください。

(委員)

活動の理解としては、毎月1回測定を行っているということでしょうか。

(健幸寿命のばす会)

毎月1回ではないです。私たちは生涯学習センターの「まちの先生」に登録していますが、体力測定の項目が8つくらいありますので、体力測定を依頼されたグループの年齢層を考慮して測定項目を決めています。

(委員)

一回何名程度の参加者がいますか。

(健幸寿命のばす会)

姉崎公民館は1回50名、市民大学のときは30名程度です。当団体に所属する11名のうち、毎回全員が行けるわけではないので、30名程度の方が、参加者に目が行き届くことができ、ちょうど良いです。

(委員)

団体として、年間どのくらいの頻度で測定を行いたいという目標はあるのでしょうか。

(健幸寿命のばす会)

老人クラブや各地区のところに行って、体力測定を実施したいという思いはあるので、計画中です。

(委員)

計画書には、チラシを印刷するとあったがどうなったのでしょうか。

(健幸寿命のばす会)

当団体の担当者が体調不良でPR広報誌が期間内に作製できませんでした。

(委員長)

申請された際にも、いろいろお話は伺っていましたが、参加してくださる方が自分の健康状況を把握してもらい、独自の測定方法や記録の記入の仕方を工夫していくという点は、ある程度形としては整いつつあるのかと思いました。

広報誌が作製できなかったという点のほかに、講演会も実施できなかったのでしょうか。

(健幸寿命のばす会)

講演会は2月に予定していたのですが、講師の日程の都合が合わず実施できませんでした。次年度では必ず実施したいと考えています。

(委員長)

どのように取組を広く周知させていけるかは大事な所ですので、今後も努力を重ねていただければと思います。先ほども話がありましたように、いろいろな場所に出向いて、参加者が自分たちの健康づくりに役立ててもらうことが趣旨だと思いますが、出向いていくこと自体、メンバーの人的対応でなかなか広げられないというところもあります。

様々な場所に出向いていくのであれば、メンバーを増やしたり、メンバーの技術も伝えていったりということも必要になってくると思いますが、仲間増やしはどのような状況でしょうか。

(健幸寿命のばす会)

2月に行われた健康大使の報告会で会員募集のお願いをしました。また、今後作製予定の広報誌にも記事を載せていきたい。

(委員長)

この活動をしていくときに、多くの方々が参加してくれたと成果効果に記載がありますが、もう少し明確にしていけるといいと思います。何回開催し、どれぐらいの方が参加して、自分で体力測定を記録していくことで、その方がどのくらい健康への意識を持つようになったかという情報が見えるようになってくると、次の誘いにつながる。活動されている状況をできる限り伝えるということを中心けていただきたいと思います。

以上で、「健幸寿命のばす会」様の報告を終了とします。

(委員長)

それでは、報告予定のうちの前半3団体が終わりましたので、ここで10分程度休憩を取りたいと思います。10時15分から再開します。

— 休 憩 —

(委員長)

それでは再開いたします。「親子サポート Cocorosalon Aun」様、成果報告をお願いいたします。

— 「親子サポート Cocorosalon Aun」 成果報告 —

(委員長)

それでは、委員の講評をお願いします。

(委員)

発達障害やグレーゾーンの子の両親は、子どもが小さいうちから理解してくれるのでしょうか。

(親子サポート Cocorosalon Aun)

幼少期には感じなくても、小学校など集団生活に入ってから強く違和感を覚える場合もあります。早いうち、小さいうちからが良いというわけではなくて、違和感であったり、子どもに何か変化があったりした際に、親が「うちの子は普通と違う」だとか、何とかやらせる手段を考えるよりは、どこかに相談したり、声をかけていただくようなやわらかい対処の方が、子供のためには良いと考えています。

(委員)

私も市内で自然学校を運営して13年くらいになりますが、発達障害の子を2人ほど受け入れた経験があります。当時は、「自閉」という言葉でしたので、心を閉じている子という認識で、受け入れて驚いた経験があります。それ以来、勉強し始めた状況でした。

世の中の理解はまだまだだと思しますので、その点は苦勞しているのではないかと思います。今回、木村先生の話を知って、このような学校が市原市内にもできればすごく変わってくると思いますし、そこまでに行くのは大変な道のりだとは思いますが、頑張ってください。

質問ですが、資料には「Aun 寺子屋の充実」とありますが、現在、どのような事業を行っているのでしょうか。

(親子サポート Cocorosalon Aun)

Aun 寺子屋は、基本的に毎週月曜日の夕方に開催しています。子供たちが自由に集まってくる時間から勉強のスタートまでに20分時間を取っていて、その時間で、学校やこの1週間間に何か落ち着かないことがあった子供たちは、うちに来てもずっと唸っていたりするので、まずそのような子がいればスタッフが声をかけて話を聞いたりしてクールダウンさせています。その後20分間だけ学校の宿題を見えています。

その後、休憩を挟み、皆でボードゲームをしたりしています。集団の中で勝ち負けがあつて、感情があつて、感情を感じたときにどのような対応をしたら良いのかということを経験を重ねていっている感じです。

(委員)

現在は何名通っておられますか。

(親子サポート Cocorosalon Aun)

基本は4名です。それから、元々は親の支援にも力を入れたかったのですが、夏休みや冬休みなどに親と子どもを離したかった。夏休みや冬休みに毎日行動したり、暴れる子どもと一緒にいたりすると、親としてもどうしていいかわからず離れたくなります。ですから、半日とか子どもを預か・罜り、一緒に勉強したり、プールで遊んだりする時間を作ったりしているので、そこへ参加する子供たちが5、6名います。

(委員)

発達障害の子どもが差別なく暮らせるには、周りが気づいたときに、貴団体で行っているような短期的に週に数回集まって学習するというのと、特別支援学校のようなところで職業訓練をしてもらうケースとあると思いますが、それは発達障害の度合いによって違うのでしょうか。

放課後学習くらいで社会の中に溶け込んでいけるようになるというのと、きちんとした職業訓練を受けさせて特殊な能力をさらに磨きをかけて社会に出ていくのとどちらが良いのか私にもよくわかりません。

その辺りはどのように整理されているのでしょうか。

(親子サポート Cocoroalon Aun)

Aun 寺子屋に通っている子は、普通学級にいるか特別支援学級に所属している子どもたちで、地域の公立学校に通っています。特別支援学級に行けるとか、普通学級に行けるとかというのも、先生のさじ加減次第というところがあり、周りの環境であったり、それぞれの認識であったり、どこが良いとははっきりしないと思っています。

身体が不自由で動かないという場合は、どこが不自由であるかがわかりますので、手を差し伸べやすいですが、発達障害の場合は普段は普通でも、何か自分の中でうまく消化できないときだけ奇声を上げたり、急に手が出たりしますので、Aun 寺子屋では少人数で週 1 回開催しています。どういった形がいいのか、日々模索しています。

(委員)

特別支援学校へ行った方が良いとか、担任の先生が勧める場合は、病院のセカンドオピニオンのように複数の人が診断してくれるようなことも今後は必要なのでしょうか。

(親子サポート Cocorosalon Aun)

Aun 寺子屋に通っている子の問題で、一緒に学校に行ったりしたことはあります。

(委員長)

どういう実態、状況があるのかということを一概に括ることができないが故に、ケースバイケースで対応しているところもある。だからこそ、理解や認知が不足したり、ゆがんでしまったりという部分があり、どのように伝えていくのかというところに難しさがあると思います。

そういう現実があるということを丁寧に伝えていくことが、理解と支援の裾野を広げていくということにつながる。今回の活動が、知ることや理解への場や機会をつくったことは大きな一歩だったと思います。

一方で、親の理解が得られないことの難しさといった課題も見えてきた。親でない方が子どものことに気づいて手を差し伸べるといった間接的な形での相談やつなぎをどうしているか、さらに課題を難しくさせている。引き続き、各方面への働きかけをしていくと思います。着実に企業や各種施設、幼稚園、学校などにも働きかけています。これはどこかの主体が行えばよいという問題ではなく、直に関係するところでなくても、このような問題状況があるのということを知っていれば、関わり方も変わってくると思いますので、引き続き頑張ってくださいと思います。

以上で、「親子サポート Cocorosalon Aun」様の報告を終了します。

(委員長)

続きまして、「もぐらの冒険」様、成果報告をお願いいたします。

－「もぐらの冒険」成果報告－

(委員長)

それでは、委員の講評をお願いします。

(委員)

私も、ちはら台でふれあいパークをやっていますが、大変興味深く拝聴しました。活動場所もごございますし、人もおられるので、活動回数が少ないという問題意識もあるところでは、是非、実行に移していただきたいと思います。

30年度はステップアップ事業の申請はされていません。ある程度資金が必要だから、会費をとろうと計画されていますが、市では、市民活動支援の補助金のほか、冒険遊び場事業という補助金を出しています。一度相談に行かれたら、もっと広がりが見られると思いますが、いかがでしょうか。

(もぐらの冒険)

活動を始める前にも、子ども福祉課、公園緑地課、市民活動支援課には相談に伺っています。実は冒険遊び場事業（プレパーク事業）の相談に何度も行っています。活動基盤をつくるにはその取組をした方がとも思いますが、まだ私たちの方にも迷いがあります。視野に入れながら活動しているところです。

(委員)

子どもの遊び場の問題は、注目している人もいて、催し物の会場に子どもの遊び場を必ず作ったりします。また、耕作放棄地で自然体験や泥んこ遊びをしたりする団体が増えているように感じます。

しかし、それらの団体を俯瞰して調整していくような、中間支援的な組織は不在ではないでしょうか。都会の子どもは遊ぶところを探しているし、田舎で自然体験をしたいという子どもたちもいて、それを調整できるような大きな中間支援があると、いろいろなところに波及効果があると思いますが、どう思いますか。

(もぐらの冒険)

全国ネットワークである「日本冒険遊び場づくり協会」という団体があり、連絡を取りながら、相談したり、講師を派遣してもらったりできます。

千葉県にも「千葉県冒険遊び場づくりネットワーク」があり、加盟しています。

(委員)

一団体が資金調達から何から全部を行うというのは限界があって、資金調達は中間支援組織にお願いするとかできるような仕組みができると、まだまだ伸びるのではないかと感じました。

(もぐらの冒険)

資金調達に関しては、傾聴の「やすらぎ」の皆さんがおっしゃっていたことに共感しているのですが、遊び場開催にあたって、その参加者から参加費用を徴収しないようにしています。

消費者としての性格が強いので、お金を出すとなるとそれに見合った何かを得て帰るといった感覚が強くなり、同時に危うさもある。そうした場合、どう資金を調達するかとなると、協力者を増やすか、補助金や民間からの助成金をいただくか、ファンด์をつくるしかない。

最大の問題ですが、自分たちで全てを賄うことの難しさも感じているので、その辺りは考えていきたいところではあります。

(委員)

事業計画がしっかりしたものになると、スポンサーや支援してもらえる企業はあるのではないかと思います。

(委員)

成果報告を聞いていまして、主催者側からの発表は聞けたが、実際に参加した親子からの反応や成長などがもう少し見えた方が良いのかと思いました。

例えば、参加している親子が一定の時間だけでも、親と子で別々の時間を過ごして、そういうときの親の感想とかが見えると良かったと思います。

(もぐらの冒険)

実際の活動の中では、保護者だけで集まって話している姿も見受けられました。しかし、最初からそうだったわけではなく、初めての参加者は、お子さんの後を追っかけている姿が多いです。

ところが何度か来られた方々は、慣れている人たちに触発されたりして、様子を見てみると、子どもたちだけで遊ぶものだということが次第にわかってきます。悩んでいるのが自分だけではないということがわかってくると、親はほっとされている姿があった。これからはそういう声を拾ったり、そういう姿をおさめたりしていきたいと思います。

(委員長)

消費という視点からではなく、子育てを地域ぐるみで考えていくということが大事で、我々の生活環境が変われば、働く環境も変わる、子育てする環境も変わるいろいろなものがある。子育てに関してもまだまだ認識として、どこかに預ければ大丈夫だという感覚がある。社会環境は変わっているけれども、意識がついていけない。

子育てを本気で地域で共有していくというのを目指している方が少しずつ出てきているとは思いますが、まだまだ地域の感覚としては弱いと思います。活動してみてどんな実感を持たれていますか。

(もぐらの冒険)

私たちが主催者としてイメージしていた遊び場というのは、子どもたちが勝手に始めるものでしたので、参加者は遊園地にきたように、何かしらを受けられるという感覚で来られる方々が多かったです。何をしてもいいですと案内しても、何をしてくれるのですか、何を教えてくれるのですかという感覚で、自分から何かを見つける、誰かに話しかけるよりは、こちらの投げかけや提供を待っている姿勢が多かった。

いつものコンビニで買い物するような延長線に私たちの団体がいるような感覚なのかと思いました。逆に、子どもたちは来たらさっと溶け込めますが、大人は暮らしている中で、そのような感覚に慣れてしまっていることに改めて驚いたところです。

人と人が出会うことで、意識が変わっていくところを、3年の活動を通じて感じてきたところで、最近、「遊び」というテーマでやっていますが、共同性を強く考えるようになりました。皆で作っていくということと私たちが主体だということを伝えていきたいと考えています。

(委員長)

どこかに預ければいいとなりがちですが、そうではなくて、一緒に考えながらやっていけるかという発想がこれから問われてくる。そういうものの大切さをこうした活動を通じて、できる限り発信して行っていただきたい。子育て環境を充実させるといっても、地域での横のつながりの必要性は指摘されていても、なかなかつながってこないという現実もあるか

と思いますので、こういう活動を重ねながら、同時に働きかけをしていく。それぞれが持ちうるものを提供していくとともっとこんなこともできるといった膨らみにつながっていくといいと思います。

以上で、「もぐらの冒険」様の報告を終了します。

(委員長)

最後の「オリーブコミュニケーション」様、成果報告をお願いいたします。

－「オリーブコミュニケーション」成果報告－

(委員長)

それでは、委員の講評をお願いします。

(委員)

大変素晴らしい良くまとまった報告を聞かせていただきました。地域に根差してきている姿がよくわかって頼もしいです。これからも頑張っってより多くの地域を巻き込んで進めたいと思います。

(委員)

地域づくりの担い手の確保や育成が大きな課題になっています。総務省では29年度から地方に定期的に通って、地元の方と対等な関係を結べる人を味方につければよいということで、「関係人口」という言葉を使い始めた。貴団体は当初から「関係人口」の増加を進めているので、先駆者ではないかと思っています。

今後どのようにすれば、地域に関係人口を構築できるか、アドバイスなり、お考えをお聞かせいただければありがたいと思います。

(オリーブコミュニケーション)

「関係人口」は非常に大事であると思っています。意識しているコンセプトの一つでもあります。私たちも一人でも多くの人を巻き込めるかということは常に考えているところです。

しかし、「関係人口」の前提として、地域に魅力がないと「関係人口」というのはついてこないと思っています。今回も千葉大学の演習がありましたが、多くのメンバーは70代で、時間をかけてくれているのは70代です。時間があるからだとは思いますが、そこに行くといつもいてくれるというのがベースになっているかと思っています。

魅力あるベースがあって、地元の魅力をいかに出していくことが一番で、ITやデザインなどに意識がある若い人などのターゲットに向けて通訳してくれる役割の人が増えていく

必要があると思っています。

(委員)

新しい経済が始まるのかなと思っています。今までの新自由主義的な経済と違って、共感を中心にした新しい経済、最近は行動経済学とか言われています。

ただ、日本の社会はまだフォーマル組織が強い。フォーマル組織を作った方がいろいろな点で有利だと思います。本当はインフォーマルな組織の方が面白いとは思いますが、いろいろな協力を得るにはある程度フォーマルな組織にしていけないかとは思っています。

(委員長)

事業内容については、委員ご指摘のとおり、いい展開がなされていると思います。

一つ伺いたいのは、オリーブコミュニケーションといったときの「オリーブ」という視点はすごく見えてきます。つまり「緑」ということを通じて、マップの活用やイベント開催など、緑との共生、緑を通じた価値づくりに取り組んでいくことは見えてきますが、「コミュニケーション」については、どういうことを考えているのかを聞いてみたい。

「コミュニケーション」は英語で言えば、「コミュニティ」であり、いろいろな意味でのつながりという意味合いがありますが、もっと掘り下げていくと、ただ単に人と人とが連携していくというだけではなくて、コミュニティの本当の言葉の原義は「生きる」ということへの繋がりで。

「生まれる、育つ、学ぶ、働く、老いる、死ぬ」という人間の営みが「コミュニケーション」を通じてつながっています。だから、世代も分野も超えていく。そういうつながりの中で協働の視点を膨らましていける。

かつてあった農村社会では、それが成り立っていた。近代国家ではそれを取り崩して、行政が税金でもってサービスに変えていったし、市場社会にシフトしていった。これから問われてくることは、コミュニティの再構築ということであり、それは世代のつながりであり、生活することへのつながりであります。そういうことをまさにこの場、空間を通じて、一つのモデル、可能性として展望していくということを考えているのかなという印象です。

そうだとすると、今後どのようにそれを見せていけるかを聞いてみたい。今、お考えになっている範囲で教えてください。

(オリーブコミュニケーション)

そういう大きなテーマを考えながらやっている取組ではあります。一人ひとりが生きる意味につながることは、何かをケアしたり、何かをケアしてもらったりそういう関係性がハッピーになるものやヘルシーになるものにつながっていくものと考えています。そういう相互にケアされる関係が生まれるコミュニティを作っていきたいですし、必然的に多世代のコミュニティになってくるものだと思います。

もう少し具体的なレベルに落として考えているのは、お金を回していかないといけないので、今後会員制度をどう作っていかうかと考えています。「オリーブ」という商品があるので、お金を回していける可能性もありますが、先の団体でも話がありましように、生産者と消費者という関係になりやすい。生産消費が悪いというわけではないですが、ケアになる生産消費とケアにならない生産消費があると思っていますので、いかにケアという観点が織り込まれるような関係性で、会員制度をどのように構築するかが、大きな課題になっているところです。他の団体の例を教えてくださいと思っています。

(委員長)

その辺は、いろいろと考えていかないといけないところだと思います。先ほど新しい経済という話もありましたが、全てをお金に還元していかないということもありうる。これは我々の間で交換理論として議論するところですが、是非、具体的にどんなことができるのかを見せて行って、試して行っていただきたいと思っています。

以上で、「オリーブコミュニケーション」様の報告を終わりにしたいと思います。

これにて全ての団体の報告が終了いたしました。

最後に、委員長の立場として私から全体講評ということで、述べさせていただきます。

本日、6団体の成果報告を伺って、採択した立場としても、採択して良かったと思いますし、それだけの努力と成果を出されたことに、改めて日々の取組に敬意を表したいと思いません。

市民活動を応援することが、この補助金事業の主旨です。その点から申し上げますと、市民活動のポイントは行政がどうということではなく、市民や住民の感覚で、どういうところに問題、課題があるのかを捉えているのかということです。

行政や専門家が課題にすることが全てではなくて、日々の生活の中で見えてくるもので、何とかしなくてはいけないのではないかとということに目を向けるということが、市民活動の大きなポイントです。どこにどのような問題や課題があるのかということは、我々は知っているようで知らない。

だからこそ、そこに目を向けて、掘り下げることによって、問題が可視化され、共有化されていくようになると思います。本日の活動団体の皆様もその点を抑えていると思いますし、そういう意味での問題提起あるいは巻き込みにつながりつつあるのかなと実感いたしました。

そこで、さらなる今後の課題としてポイントになるのは、その課題をどれだけ掘り下げられるかどうかだと思います。どの活動団体ももっと多くの人たちに取組を知ってもらいたい、巻き込んでいきたいということを課題とされていますが、そのためには、自分たちが取り組んでいる課題をどれだけ掘り下げられるかどうか。つまり、一般論にとどまると人は他

人事にしか受け止めてくれない。他人事ではなくて、自分の問題として、皆で考えていくのだという点を膨らませていけるかどうか、今後相当問われてくると思います。

そのためには、一般論にとどまっている状況を打開して、こういう問題がある、皆で考えていかないといけない、という深堀と発信をさらに丁寧にやっていけるかが幅広い協力者を募っていくことにも、理解を得ていくためにも必要になってくることだと思います。

私も、いろいろなところで事業を審査してきましたが、課題が一般論にとどまっている団体が多いです。一般論ではなくて、具体的な問題や掘り下げられ考え抜かれている課題については、共感を呼ぶところがあって、そういうことをされている団体は活動を続けてもいるし、広がりも見せています。この点を、さらに徹底していけるかどうか問われてくることだということを改めて指摘させていただきます。

もう一つは、活動の横の広がりです。よく連携が大事だと言いますが、連携のための連携であれば意味がありません。問題の深堀、掘り下げを通じて、自分たちだけでは困難だということが見えてきて、もっといろいろな人たちと協力したいと思うわけです。人、お金、理解と共有が必要だということを実感してくるところだと思います。掘り下げを通じながら、横に広げていく、横に働きかけていくことを徹底してほしいと思います。

深堀したことを見せていけばいくほど、そういう問題があるという共感は確実に広がっていくと思います。反応が弱いということは、伝えきれていないということでもあります。自分たちの活動がダメというわけではなくて、伝えきれていないということで、そこが腕の見せ所、工夫のしどころになると思います。

これだけ情報が氾濫している社会の中で、自分事として受け止めてもらえるというのは限られます。どういう情報発信の仕方が自分たちの活動を伝えることになるのか試行錯誤していくしかありません。相手がどういう人たちかによっても伝え方が変わってきます。いろいろなターゲットに合わせながら、伝え方も工夫して行ってください。

問題や課題が共有される中で、協力できるといってくださる仲間が出てくることがある。関わり方も様々で、一緒に活動は無理でも寄付ならできるという人も出てくるでしょうし、お金はないけれども、時間はあるのでこういうことだったらできるという人も出てくる。

活動を深めていくためには、自分たちが考えていることを伝えると同時に、どんな人たちにどんな活動が必要とされているのか、具体的に訴えかけていくことです。こんな力が、こんな作業が必要とされているということが具体的に見えてくると、そういうことなら私はできるということも出てきます。

寄付にしても、寄付してくれないと団体は言いますが、他方では寄付してくださいと言われてないから寄付しないということもあるわけです。そういったねじれみたいなものもあるので、様々な角度から働きかけていきながら進めていく。

情報というのは伝える側の論理で作られます。私たちがこんな一所懸命やっているのに、なぜ理解されないのかというのは、作る側の都合と論理で情報が作られているから、相手の立場にたった情報になっていない。相手の立場に立っていない情報は、相手は自分事として

受け止めてくれません。自分の想いを伝えるということは大事ですが、受け手の目線で捉えてみて、どのように伝えたら、相手方にイメージが膨らむのか、関心の喚起につながるか、工夫のしどころです。情報は、受け手を常に念頭に置きながら、考えていってください。

また、物事の考え方を変えて、子育て、高齢者支援、地域活性化をとっても従来の発想だけでは維持できないことを訴えていくことも市民活動には大事なことです。訴えていくことにも力を入れていっていただきたいと思います。

最後に「協働」について一言申し上げたいと思います。「市民参加」と「協働」は視点が違うところがあります。

「市民参加」は活動されている団体が、自分たちの志と想いをもって、自分たちで人も資金も集めて活動をしていくことが市民活動です。「協働」は市民との協働や行政との協働がありますが、特に行政との協働といった場合、市としても協働の裾野を開いていこうとしています。行政との協働は、市民と行政とのやりとりを重ねていくことで、誰がどういう役割を果たしていくことがこれから求められていくのかを一緒に考えていくことが「協働」です。どういう役割分担、どういう連携ができるか、答えはどこにもなく、やりとりを通じながら見つけていくということが「協働のまちづくり」ということだと思います。

市民活動として進めていった方がいいのか、行政とタッグを組んで進めた方がいいのか、課題の掘り下げ方によって変わってきます。皆さん自身の判断の仕方も問われてくるころです。

自分たちは市民活動として取り組んでいくという選択もありますし、行政が税金を使って進めていることと団体の自主事業として進めていることが組み合わせたら、こういう活動ができるというイメージが膨らむところがあるのであれば、協働事業で進めていってもいいと思います。課題を掘り下げていく中で、どういう形がいいのか模索しうるところです。「市民活動」と「協働」の両方の裾野が皆さんには開かれているということを最後にお伝えしたいと思います。

いずれにしても、本当に良い形で活動を展開されていると思います。今回の活動に補助金が活かされたとするならば、良い展開になっていると思います。いろいろな課題が山積しているところもあると思いますが、今回一年間活動されたことも大きな契機としながら、次なるステップに進んでいただければと、今後の活動の発展を願ひまして私の講評にかえさせていただきます。

それでは、本日予定していた議事について終了しました。

(司会)

長時間に渡り、皆様お疲れ様でした。以上をもちまして、平成 29 年度第 6 回市原市市民活動・協働推進委員会を終了といたします。

以上